

経営資料

No.196 会社訪問

代表取締役 坂田 淳 氏



QUER 株式会社

会社プロフィール

代表者:代表取締役 坂田 淳
 本社:〒224-0042 神奈川県横浜市都筑区大熊町83-2
 横浜工場 TEL:045-471-6722(代) FAX:045-471-6927
 綾瀬事業所 〒252-1111 神奈川県綾瀬市上土棚北3-18-43
 TEL:0467-38-6190(代) FAX:0467-38-6192
 設立:1974年(昭和49年)8月
 資本金:1,000万円 従業員:21名
 事業内容:[インダストリアル事業] 低真空から超高真空領域の装置及び、
 周辺機器の開発、設計、製作/産業機器周辺治具製作/真空
 関連中古機器の販売
 [アセンブリシステム事業] 各種制御コントローラー、電源ユニット、
 制御システムの開発、設計、製造/一般汎用ケーブル、高
 電圧ケーブル、汎用・特殊電源ケーブル
 U R L: https://quer.jp/

聞き手:梅垣喜通(顧問)、岡田康弘(編集長)、取材・撮影・編集:クリエイティブ・レイ(株)



頭のモヤモヤを具現化するQUER。分析用試料前処理関連・真空関連機器の開発等、
 前例に捉われない実行力で、各研究機関・産業界のニーズに柔軟に対応

御社の事業内容についてお聞かせください。

坂田 弊社は主に、試料の前処理プロセスに特化した装置の開発、設計、製造などを行っているメーカーです。低真空から超高真空の領域に至るまでの真空関連の複合装置、分析用試料前処理装置、さらに真空の分野に限らない産業機器装置、メカ、電源システム等の開発、設計、製造、それに伴う多々の専用治具を提供しています。

システムアセンブリ事業では、高圧ケーブルや特殊コネクタを用いた電源、カスタム制御機器などのオリジナル製品に留まらず、既設置のカスタムなど、QUERの中で解決できることは何でも全力で解決に向かうスタイルが特徴です。

また、弊社の強みでありスタンダードは、お客様の「頭のモヤモヤを具現化」するということです。例えば学校の先生や研究者の方が頭の中で「ああしたい、こうしたい、少し話しをしたいから来てほしい」と、ご自身の頭のなかでは構成(構図)ができあがっている、しかし、整理された仕様書や提案書があるわけではありません。また、モヤモヤの内容はやはり、文書化が非常に難しい事柄がほとんどです。そうした「モヤモヤ」としたご要望やニーズに対し、ヒアリングさせていただき、言葉から形にしていくところを得意としております。

弊社はもともと電気制御関連など制御系には従来から強みがあり、それにプラスして真空関連のノウハウがございます。例えば、ご相談いただいた研究機関の先生が望むことを実現するためには、別に超高真空の環境にする必要がない場合もありますし、さらに予算の事情と照らし合わせながら、排気フローの構成から使用する排気ポンプの選定など、どれがベストなのかなどをお話の中から具体化していきます。

構想・設計は基本的には弊社1社で動いていて、規模や内容により、専門的な協力体制を整えたほうが最適と思われる場合は、協力工場と一緒に働きかけ、連携してタイアップで共同開発するなど、柔軟な体制をとっています。

製品は、前処理プロセス関連の製品が多いですね。

坂田 はい。例えば前処理加熱装置については、兵庫県播磨にある大型放射光施設のSPring-8です。ビームラインを産業利用する企業さまからのご相談がスタートとなりました。そして、その延長線上にある装置が現在、弊社で製造販売している『ROSY』というものになります。

前処理について少し具体的に補足します。例えば800℃の熱を3日間かけたらどんな組織変形を起こすのか

経営資料

などを知りたい場合、当然、試料の加熱処理を施します。表面にわずと引掻き傷をつけ、アルゴンや水素などでガス置換させ、ターゲット温度に加熱して熱処理を行ったりもします。そして3日間放置した後に、同じ環境のまま試料を取り出し、SEMやXPSなどの分析装置で試料の組織変化を分析するのです。

それに対して弊社の熱処理には特徴があります。通常はいまお話したガス置換などの処理をするたび、工程ごとにサンプルを大気暴露して取り出したりし、せつかくの環境をダメにしてしまいました。そのために環境をまたゼロから作り直す必要があり、大変非効率でした。

弊社製品はお客様が希望する前処理を、柔軟かつコンパクトに集約でき、さらに大気に触れさせずにガス(真空)雰囲気密閉した状態で分析装置に送り込み、即時に分析できるプロセスまで運べます。前処理関連機器の需要は、最近、特に高まっているように感じています。

御社は長い歴史がありますが、現在の社名に変更した理由をお聞かせください。

ターボ分子ポンプを主ポンプとした
 多用途向け高性能真空排気ユニット ALLEGRO



『真空の可視化』TMPのステータスや現在の真空値を、離れた場所からでも認識することが可能。



企業サイト

製品サイト

高真空対応分析用前処理加熱装置 ROSY



『真空・加熱(冷却)・ガス置換』すべてのアプローチを非暴露で。ホルダーを選ばないチャッキング機構を開発導入。

坂田 私が社長に就任した3年前に社名を改称しました。以前は有限会社三京電子工業という社名で、会社の設立は1974年(昭和49年)です。設立当時は電子機器の設計や製造がメインでした。私は2代目の社長で、創業者とは親族関係にはございません。

私が社長になる前の時期に、実は退社して独立することを考えていました。それまでは社内の従来の体制、経営などではなかなか将来的に厳しい見立てがありました。一方で、お付き合いをいただいていた方々から会社を立て直して欲しいという声もいただきました。

大変に悩みましたが諸事情を鑑み、会社を引き継ぐ決断をしたのが2022年(令和4年)です。社名をQUER株式会社と改称するとともに、今までの社内文化や環境を刷新することを進めてきました。

真空関連へ拡大していったきっかけをお聞かせください。
 坂田 当時、表面分析装置メーカーの制御製作担当でした。その流れから多々の交流が増え、現在、真空業界の隙間に身を置かせていただくことに繋がっております。

そして社長就任を決める前後に、真空関連の事業をしていたお客様であった、株式会社サイエンスプラスを吸収し、事業を継承した大きな出来事がありました。同社がやむなく解散する報せを受け、所属していた営業、設計などの従業員の方々、また工場や事務所など設備を弊社に吸収させてもらう形をとりました。サイエンスプラス社は真空業界だけではなく、産業機器(装置)の設計、製造などで活躍された方が経営していたのですが、他界されてしまい非常に残念な事情がございました。

これまでに経営者として強く印象に残った出来事があればお聞かせください。

坂田 代表として動き始めた後、色々な方からバックアップをいただいたことが、私自身の深層心理に埋もれていたことを目覚めさせていただいたように感じています。印象的な出会いの1つに、弊社の技術顧問に就いていたいた芦野との出会いがあります。元株式会社アルバックの超高真空事業部で活躍した後、アルバック・ファイ株式会社が発立された時からのスタートアップメンバーとして長年第一線で活躍していた人物です。

初めて芦野氏と出会ったのは、アルバック・ファイ社と東

経営資料

北大学の金属材料研究所が連携していた仕事に関わった時でした。芦野氏は当時東北大で行われていた純度99.9996%の超高純度鉄(アビコアイアン=Abiko-Iron)を研究するプロジェクトチームに参加していて、私はその研究装置でFZ(FROTING ZOON浮遊溶融精製装置)や超高真空熱処理装置などの関係で少しだけ絡ませていただいております。

当時の私はこの業界に足を踏み入れて2~3年、まだ25歳前後でした。現場で初めて芦野氏と会った時、挨拶もそこそこに、何かにとり憑かれたような勢いで喚き、指示を出し続けていました。正直なところ「この人は一体どうしてしまったのだ!?朝メシでも食い損ねて機嫌が悪いのか?」という、すごいインパクトがありました。とにかくずっと1人で喋り倒していましたね(大笑)。

その後も芦野氏とお付き合いを続けてきて、私がQUERという新天地の代表になったのを期に願って入ってもらいました。やはり人との結びつき、横の繋がりというのはいつの時代でも大切な財産だと肝に銘じております。

これまでに経営上最も困難だとお感じになった出来事があればお聞かせください。

坂田 経営者になって日が浅く、まだそんなに困難や壁に当たったと感じたことはありません。しかし、苦しい状況に置かれる時には、それまで意識もしていなかった視野や視点に着目することが知らず知らずのうちに身につくように思います。そのようにマインドプロセスに新しいエッセンスを加えていくことが、困難を解決するきっかけになるように考えています。

御社の製品やパンフレットは、ハイブランドのファッションを想起させるような独特な上質感がありますね。

坂田 私自身、まったく毛色の違う業界に従事していたため、業界的な「こうである」という部分がありません。目的だけを達成するのではなく、インダストリアルな中にもデザインや艶があって良いと感じております。それはもちろん云うまでもなく、安全性や操作性など求められることをしっかりと網羅してこそ「独特さ」であり、弊社製品は工業製品の中でもフォルムなど独特だと自負しております。

ちなみに若い頃は、全く違うヘアメイクの業界で仕事をしていました。

ヘアメイクと聞くと、上質さに納得するようになります。

坂田 某工業大学へ進学するか見つめ直ししている時、ヘアメイクに魅力を覚え、大学へは行かず、ヘアメイク業界で活躍されている師匠の下に飛び込みました。主にファッションショーを主軸として活動し、非常に刺激的な世界でしたが、ヘアメイク業界の体質はかなり独特で奉仕のようなことも多くあり、生活を成立させることが困難でした。

そうした中、実は居酒屋でたびたび顔を合わせて話すようになっていたのが、先代社長の義父にあたるかたでした。「暇だったらうちに手伝いにこないか」という言葉に誘われて23歳の時に大きく転身しました。元々理系的思考は得意だったので、手伝い始めてすぐにかんがいの面白さを感じ、その後、電気電子関連などを独学で勉強しながら、今日までやってまいりました。

御社の経営方針などはございますか。

坂田 「Brain First Factory」、つまり「脳が第一の工場と考えよう」という話をしてしています。まず自分の頭の中で整理したものを提出できないと物はでき上がらないわけです。8割方の仕事を脳内でまとめて整理して提出し、そこから製品として色づけされていくわけですが、その色づけをする過程でも「色々なところから色々なものを吸収しなさい」という点を徹底して話をしていて、会社の基本理念に根付かせているところです。

そして製品においては、もともとの土壌が違うせいもあり、工業的な要素よりは「マンインターフェイス(操作性・デザイン)」を優先して構想しています。

また先日、協会創立80周年記念祝賀会で講演された東京科学大学の竹尚登理事長のお話の中で触れていた「Visionary Intiatives(VI:ビジョナリーイニシアティブ)」という包括ビジョンを聞いていて、まるで自分の考えを代弁してもらっているような気持ちを抱き、スッキリとした清涼感が溢れました。数年前から近いことを考えることが多かったのです。大竹理事長のお話は本当にためになることばかりであり、語り口もお上手でずっと聞いていたと感じました。

プロジェクトを統合する時、メンバーを「排除しない」「相手を否定しない」という内容のところなど、本当に納得しましたし、あのお話は「実際に自分で成し遂げたからこそ、このような説得力があるのだな」と感じました。

経営資料

現在の課題や目標をお聞かせください。

坂田 近年中の目標は、弊社製品を実際に触れていただけの機会を増やしていくことです。展示会の出展や、社内デモスペースを設けることで、ユーザーさまの声を拾って反映させていき、使用感を向上させていきたいです。皆さま、JASIS 2026のご来場をお待ちしております! また事業展開とは別に、小中学生に向けた真空教室や電気・電子工作教室のようなワークショップを夏休み等の期間を利用して行いたいと思っています。こどもの頃からそうしたものに触れる機会を増やしたいという理由からで、行政からも活動を後押ししてくれそうな好意的な反応をいただいております。

そして「真空」という目的を達成させるだけのプロセスではなく、別角度からの「真空」をアプローチするスタイルを模索しておりますし、その他あまり詳しくお話できませんが、真空技術などに捉われずに超電導材料と南鳥島沖で話題になっているマンガン/ジュール使用に向けた多用途装置の開発も進めています。



▲JASIS 2025 QUERブース前

ここからは、坂田社長の個人的なお話を聞きます。

座右の銘や、好きな書籍などはございますか。

坂田 「思考回路はファジー制御」という言葉を大切にしています。曖昧さをどう理解するかによって物事の考え方はすごく変わってくると思うのです。デジタル的に1と0で判断するケースもあるわけですが、0.1、0.2という小数点以下のところのアナログ的な感覚を持てることは、人間の良さだと常々思います。デジタルのように0と1で短絡的に考えるのはバックボーン、つまり経験値から培っている判断だと思います。デジタルとアナログの間に潜む意識は、人間を含む生き物すべてに共通した感覚だと思います。

読む本は、昔からファッション雑誌やアート関連の書籍が好きです。北大路魯山人からは絶大な影響を受けており、その名前を子どもの頃に母から教えられたことが始まりでした。食べ物は云うまでもなく、読み物や絵画、陶器などに至るまで、自分の考えや信念をきちんと理論構成してそこから造形する点に共感し、敬意を抱くばかりです。

余暇の過ごし方をお聞かせください。

坂田 寺や神社を巡るのが好きです。以前は札所を巡る札打ちを行っていましたが、今はしなくなりましたが、地方に出た時は好んで寺を巡ります。仏教徒ではありませんが、仏教の考えや説き方には共感する点が多いです。

そして普段は散歩が好きです。同じ風景でも季節によって色合いが違い、同じ季節でも朝昼晩で変わる景色の表情を感じるのが好きなのです。その時の自分自身の心情でも、自然や街並みが変わって見えますよね。

美的な感性を大切にされていることを強く感じます。理化学の業界に身を置いていて、感性と理屈と両者に感じることはありますか。

坂田 例えば“黒い色”1つをとっても何千もの種類があります。そういう色の微妙な感じも大切にしますし、スイッチや計器類の位置などもこだわります。それは使う時の心地よさ、何回でも押したくなくなるボタンの押卸感など、気持ちよいオペレーションの“感じ”を大切にしているからです。そうした感覚的な気持ちよさを考えず、必要なものが付いてさえいればいいといった考えは、同意できかねます。

最後に、協会へのご意見やご感想をお聞かせください。

坂田 科学機器協会や真空業界においても、経営者という立場においても、まだまだ新人ですので「あれが、これが…」などの視点ができ上がっていないのですが、これまでのスタイルに固執しない、よい意味で伝統に縛られすぎない協会であって欲しいと願っています。



▲自社検査ではなく、検査専門の会社「UILA」を立上げ第三者機関としてすべての弊社製品検査を施している。

◀設立当初より、弊社のスローガンとして謳っております